

『フリードリヒ シラー』『人質』 『ドイツ語原文』

暴君ディオネソス王にメロスは忍び寄った、短剣を衣服に隠して。メロスを捕吏たちが縛り上げた。「お前は短剣で何をしようとしたのだ、話せ！」ディオネソス王に陰鬱にその怒れる男は答えた。「この町を暴君から解放しようとしたのだ！」「そのことをお前に十字架上で後悔させてやろう。」「俺は、メロスは話す、死ぬ準備は出来ている。命乞いをしようとは思わん。しかし、お前が俺に慈悲を垂れようというのであれば、三日間待つてくれ、俺が妹を許婚と結婚させてしまふまで。俺は友達をお前に人質として委ねる。もし俺が逃げたら、そいつをお前は縛り首にするがいい。」すると王は悪しき企みを心に抱いて微笑む。そして少考してから言う。「三日間の猶予をお前にやろう。しかし、わかっているだろうな！ お前が戻ってくる前にも、その期間が過ぎたら、お前の友達はお前の代わりに死なねばならん。しかし、お前の罰は免除してやろう。」そしてメロスは友人の所へ行って言う。「王は命じた、俺が十字架で悪しき企てを償うようにと。しかし、俺が妹を許婚と結婚させるまで、王は俺に三日の猶予を与えようというのだ。そういっわけ、お前が王の人質になつていてくれ、縛めを解くために、俺が戻ってくるまで。」すると黙って彼を忠実なる友人は抱擁して、身を暴君に委ねる、メロスは出発する。そし

よく言われてはいることだが、「走れメロス」のテーマは、「信ずることの大切さ」や「友情の美しさ」ではないだろう。2年生の教材で扱った以上、生徒に甘っちょろいテーマで、納得させるわけにもいかない。

左に記したのは、太宰の「走れメロス」の元となったシラーの散文詩「人質」である。

太宰の「走れメロス」創作の発端として、Wikipedia では次のように記されている。

「飲み代や宿代も溜まってきたところで太宰は、檀に宿の人質(宿賃のかたに身代わりになって宿にとどまる事)となって待っていてくれと説得し、東京にいる井伏鱒二のところに借金をしに行ってしまう。」

これが、「走れメロス」創作の発端だったかもしれないが、「走れメロス」のテーマとはなりえない。

「走れメロス」がレパブリではなく、文学作品と見るためには、やはり、シラーの詩との比較を試みなくてはならないだろう。

◇「走れメロス」にあって、「人質」にないもの

- ①「竹馬の友との殴り合いの件」
②「緋のマントを捧げる少女の件(エンディング)」

①を取り上げた際には、友情の堅さや人を疑うことの醜さなどといった解釈があがっては来よう。

②の「勇者は、ひどく赤面した。」でしめくられるこのエンディングの場面は完全なる太宰の創作であり、作品の主題を映す重要なところと考えられる。

メロスを赤面させたのはなぜなのか？という問いかけを生徒に試みる。しかし、なかなか意見としてあがってくることは少ない。教師側としては、何とか「普通の人間」といった言葉を期待してはいるが……。

メロスは北一ロー・超人ではなく、はずかしさを感じるどこにでもいる普通の人間。手のとどかない偉人を身近な世界に下ろす役割と言えよう。そこには、おそらく太宰の願望がこもっていたに違いない。こんな馬鹿正直で純粋な男がこの世界にいてもいいのではないかと。絵空事の世界でのみ活躍するヒーローが身近なところに、手のとどくところにいてほしい、それを許せる世の中であってほしいと……。

「超人」→「人間」

フィクションの中に纏われたうるおいや味わいや感傷を現実社会に生きる我々が、「それは、物語の中だけのこと」と達観ぶった受け止め方をしてしまいかちではないか。そんな気さえしてくるのである。

て三度目の曙が現れる前に、メロスは急いで許婚と妹を結婚させてしまい、心に憂いを抱きつつ急ぐ、約束の期限を逸し、山から泉が溢れ出る。小川は溢れ、流れは溢れる。メロスが杖の杖を携えて岸に着くと、橋を激流が押し流し、轟音を上げつつ波は橋のアーチを打ち壊す。メロスは川岸をさまよう、とれほど見回してもどんなに叫んでも、舟は安全な岸辺を離れてメロスを向こう岸へ渡そうとはしない。船頭は渡し舟を操ろうとせず、荒々しい流れは大海の如くなる。そこでメロスは岸辺に座り込み、泣いて嘆願する、手をゼウスの方に差し上げて。「ああ、荒れ狂う流れをとどめて下さい！ 時は速やかに過ぎ去り、南に太陽があります。そして、やが日が沈んだら、そして、私が町にたどり着かなかつたら、友達は私のために死なねばならないのです。」しかしますます流れは激しくなり、そして波は次々に砕け、そして時は刻々と過ぎ去る。メロスは不安に駆り立てられ、勇気を奮い起し、激しい流れに飛び込む。そして、力強い腕で流れを分けて泳ぐ、すると一人の神が慈悲を垂れ給う。そして岸にたどり着き、急いで進む。そして救い給う神に感謝する。そこに盗賊の群れが、暗い森から現れて襲いかかり、メロスの行く手をささぎり、殺すぞと息巻き、脅かすように棍棒を振り回して急ぐ旅人の邪魔をする。「何が欲しいのだ？」とメロスは、叫ぶ、驚愕の

余り青ざめて、「俺は自分の命以外は何も要らぬ、これを俺は王に与えねばならぬのだ！」そして棍棒を近くにいた奴から直ちに奪い取る。「友達のためだ、哀れ思ってくれ！」そして三人を力いっぱいぶんなつてメロスが倒すと、他の者たちは逃げてしまふ。そして太陽は焼けつくような暑熱を送り、そして終らぬ努力に疲れて膝は沈み込む。「ああ、神様は私をお恵みにより盗賊の手から救い、濁流から神聖な土地に救い上げて下さいました。それなのに、ここで憔悴して死ねとおっしゃるので、ね、そして私のために身代わりになつた友人に死ねとおっしゃるので、ね！」すると、ほら！ 銀色に輝く水が、近くに流れる音がする、さらさらという水音が、そして静かに彼は聞き耳を立てる。すると、見よ、岩から、囁くように、すばやく、つぶやくように、生き生きとした泉が溢れる。喜んでメロスは身をかがめ、燃える四肢を冷やす。太陽は枝の緑を通して射し込み、輝く草地に、木々の巨大な影を描く。メロスには二人の旅人が道を進むのが、急いで通り過ぎるのが見える。その時彼には彼らが言うのが聞こえる。「今頃あの男は十字架につけられて、不安は急ぐ足に羽をつけ、彼を憂慮の苦しみは追いついて。すると夕陽の輝きの中で、遠くからシラクサの城壁がほのかに光る。メロスに、家の実直な守り手、ピロストラトスが向って来て、主人を驚いて認める。「お戻り下さい。もうお友達を救うことはできません。自

分自身の命をお救い下さい。お友達は今死の苦しみ味わっておられます。毎時間、お友達は戻って来られるのを待ち望んでおられました。お友達から勇気ある信頼を、暴君の嘲りは奪うことはできませんでした。」たゞ遅くなり過ぎても、そして俺が奴に歓迎される救い手として現れることができなくても、俺は死んで奴と一つにかまるとも。残忍な暴君に友が友に対して義務を果たさなかつたことを自慢させてなるものか。暴君には二人を犠牲として殺させ、そして愛と誠を信じさせてやるのだ。」そして太陽が沈む時メロスが市の門に立と、十字架が既に立てられるの見える。群衆は口を開けてその回りに立っている。綱につけられて既に友人が引き上げられようとしている。その時メロスは力強くひしめく人々をかき分けて、「刑事よ、俺を」とメロスは叫ぶ、「縛り首にして！ 俺はここに、俺の代りに、縛り首になつていようのだ！」周囲の民衆は驚きに捉えられる。お互いの腕の中に二人は抱き合せて、そして痛みと喜びのあまり泣く。見る限り濡れていない目はなく、王にこの不思議な話を伝える。王は人間らしく感動して、すぐに王座の前に二人を連れて来させる。そして二人を長く不思議そうに見つめる。そして彼は言う。「お前たちは成功した、お前たちは私の心に打ち勝った、誠は空虚な妄想ではないのだ、私も仲間に加えてくれ、願いを聞き届けてくれるなら、私をお前たちの仲間の人目にしてくれ。